北陸・信越版 2025年も真っ向勝負

会社、商品、サービスに自信あり!!

能登復興応援！

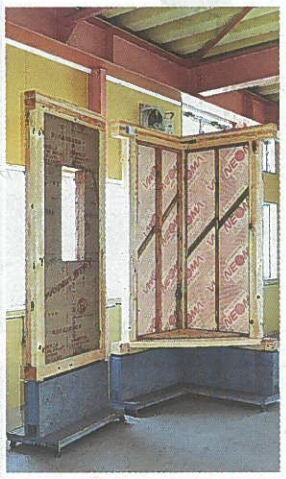
あさひ木材

「あさひMAX」の採用率上昇

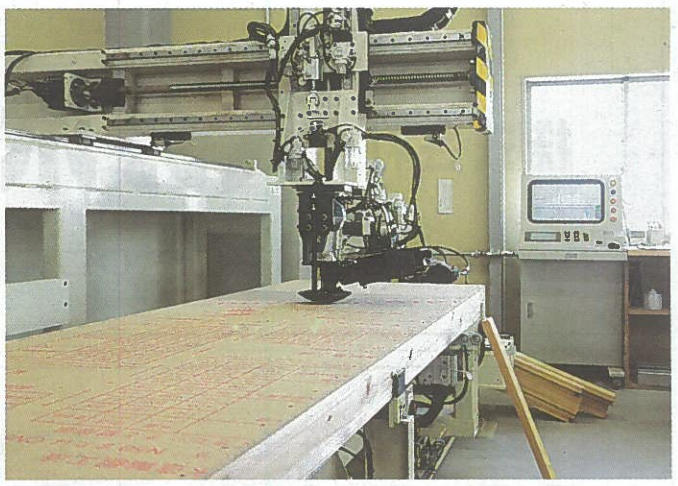
能登半島地震で耐震性への関心高まる

あさひ木材（石川県白山市、濱田亨社長）は、自社のオリジナル断熱パネル「エスキューブ」を展開。エスキューブと梁・桁用石川県産杉構造用集成材、高強度梁仕口加工「Tajima TAPOS（但馬テイポス）」の3つをパッケージ化した商品「あさひMAX」の拡販を進めている。

能登半島地震では、被災地での仮設住宅の部材加工に一部協力した。また、昨年9月以降は被災エリアから金沢市・白山市内への住み替え需要が動き始めたことで、関連する仕事が入っている。さらに、同社ではパネル枠材や集成材用ラミナを製造するための製材工場を有しており、ここで能登産杉丸太を積極的に活用することで、奥能登の森林再生の一助となることも目指している。


「エスキューブ」

能登半島地震以降の耐震性への関心の高まりや今年4月からの住宅省エネ基準義務化に向けた断熱性能向上に向けた取り組みにより、「あさひMAX」の採用比率が向上している。「エスキューブ」は石川県産杉、面材に構造用パーティクルボード、断熱材はネオマフォームを使用しており、高断熱高気密い。一昨年からは第2と県産材利用を両立したパネルだ。施工図も造作材の収まりを含めて検討しているため、大工からの評価も高提案を進めていく。


同社パネル工場の加工機

共和キカイ

顧客の要望に合わせカスタマイズ

製材機の新設・増設相次ぐ

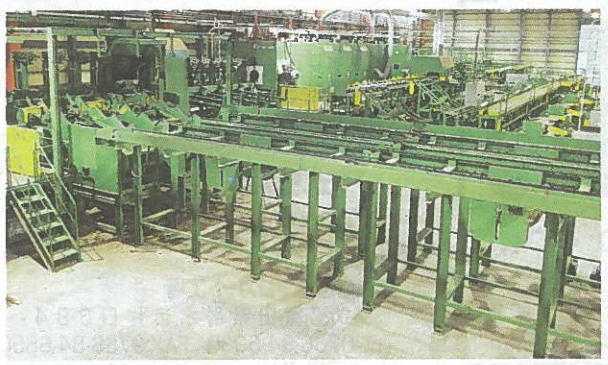
共和キカイ（石川県河北郡、今村亜喜博社長）は、「スーパー白山キャンター」シリーズをはじめとする製材機械の設計製造を手掛けるメーカー。顧客の様々な要望に合わせたカスタマイズに対応しているのが特徴だ。

最近の要望として多いのが、省人化や省力化だ。できるだけ人手をかけずにこれまでどおりの生産水準を維持したいとの声が多い。

また、小規模な製材工場の場合には、設備全体のコンパクト化も求められており、こういった要望にも柔軟に対応している。

昨年は、ランバーランドの美濃加茂製材工場（岐阜県美濃加茂市）にキャンター製材機「SHC−550」が導入された。また、四国地方の製材工場で設備する動きが出ている。

一方、中小規模の製材工場で人気なのがSHCRシリーズだ。往復タイプの製材機なので、芯材なども含めてより細かい設定での製材が可能だ。背板や端材をチップにするキャンターが一体となっているため、後処理の手間を削減し、機械制御も1人で可能と省人化にも寄与している。金沢森林組合が「SHCR−600」を新たに導入しており、今年3月には稼動する予定だ。


ランバーランドに設置された「SHC−550」

ウッドリンク

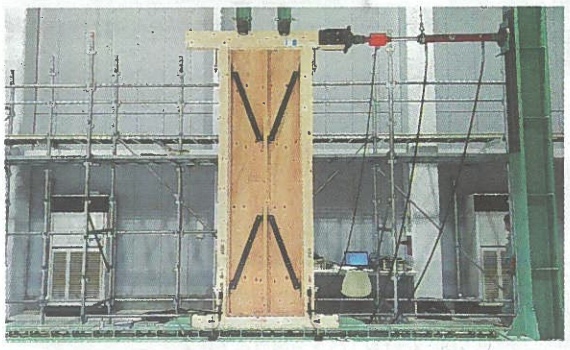
住宅・非住宅双方で「プレウォール」を積極提案

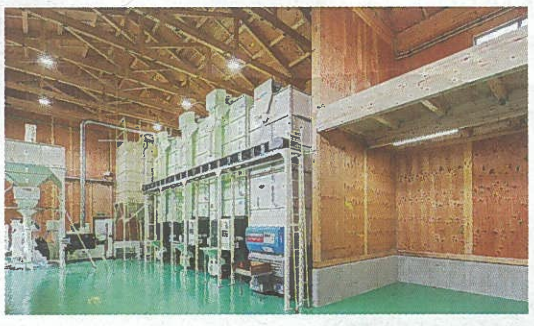
工務店でも非住宅取り組みやすいようサービスも構築

ウッドリンク（富山県射水市、原野剛行社長）は、オリジナル在来パネル「プレウォール」の拡販を住宅、非住宅双方の面から進めている。

住宅では、今年4月からの住宅省エネ基準の義務化や4号特例の見直しを見据えて、高断熱高気密性能の向上への対応をアピールしている。また、昨年1月の能登半島地震で県内でも最大震度5強を記録したことで、耐震性への関心も高まっている。こうした観点から、パネルに制震ダンパーを搭載した「プレウォールTX」の提案も強化している。

非住宅では、施工品質の向上や工期短縮のために「プレウォール」が非住宅建築で採用されている。昨年11月には、非住宅木造システム「WOODCORE（ウッドコア）」を発表。トラス屋根と在来軸組工法の躯体を組み合わせ、壁にはプレウォールを使用することで工期短縮を図るとともに、すべて同社の在来プレカット工場で加工できる内容とすることでコストの削減も図っている。最大スパンは積雪1・5㍍のエリアで10㍍。計算上は同規模の物件を鉄骨造で建てた場合と比べて、約3割のコスト削減となる。


プレウォールTX


同社が手掛けた農業関連施設。壁にはプレウォールを採用、屋根はトラス工法を使っている

サポート体制も充実しており、取引先工務店が同工法で非住宅物件を受注できた場合には、構造計算はもちろん、初期プランの作成相談や概算見積もりの作成、構造チェック、地盤調査といったサービスをワンストップで提供することができる。建て方についても職人を派遣できるので、非住宅案件を手掛けたことのない工務店でも取り組みやすい仕組みとなっている。

フルタニランバー

能登ヒバを付加価値の高い形で活用

楽器材としての注目広がる

フルタニランバー（石川県金沢市、古谷隆明社長）は、能登ヒバを使った楽器ブランド「アテノオト」が広がりを見せている。

アテノオトは能登ヒバの材料を同社が供給し、各楽器メーカーで製造している。現在、およそ30種類の楽器がラインアップされており、ギターやウクレレといった洋楽器から三味線のような和楽器まで幅広い実績がある。

楽器用材は輸入材が主力だが、年々良材を確保しづらくなっており、楽器メーカーも持続可能な原材料確保の観点から国産材への関心を示している。こうした需要を能登ヒバで取り込もうとしている。

同社では、メーカーと連携した楽器作りに始まり、アーティストとの対談をアテノオトの専用ホームページに掲載するなど、音楽業界での認知度向上を進めてきた。昨年7月にはフジロックフェスティバル2024に「国産木材ウクレレプロジェクト」として出展し、多くの音楽ファンの関心を集めた。こうした、異業種のイベントへの積極的な参加により、「異業種の方から木材の問い合わせを受けることが多くなり、木材販売でも新たなビジネスチャンスにつながっている」（古谷社長）。

昨年11月末には、人気ロックバンド「ストレイテナー」のボーカル・ホリエアツシ氏が能登ヒバを使ったオール国産材のギターだ。高山社長は「能登ヒバはマホガニーよりも目が詰まっているので音質が良く、木目も美しい。ギターの音質に重要なネックの部分との相性も良かった」と高評価だった。このギターは、ストレイテナーの全国ツアーでも披露されている。

現在、アテノオトを活用しようと様々なプロジェクトが進行中だ。古谷社長は「出材量が少なく、建築材としての需要拡大が難しい能登ヒバを付加価値の高い形で販売する道筋をつくることで、被災地の復興にもつなげていきたい」と話している。

古谷社長（左）とホリエアツシ氏。手に持っているのが能登ヒバのギター